【星を守る逸般人】

白ノ宮

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【星を守る逸般人】

夜風　紅羽（よかぜ　くれは）という名の人間が自己愛を満たすために、星野アイの殺害を阻止する話。

一応二話で完結です。

追記：２０２３／０４／２０、番外編開始。完結表示ですが気にしないで下さい。

目次

本編
上 ―― 1
下 ―― 4
番外編（キャラ崩壊・強いご都合主義・オリジナル展開等）
絶対にありえないストーリー　ｅｐ０１ ―― 9
超短編　Ｎｏ．０１ ―― 12
【星野アイとお酒】 ―― 14
休息シリーズ　０１ ―― 18
休憩シリーズ　０２ ―― 21
絶対ありえないストーリー　ｅｐ０２ ―― 24
供養作品　二作目【二番星】０話 ―― 28
超短編０４ ―― 31
ルビー×アクア　台本形式　超短編０５ ―― 35
続かなかった連載予定の話　０１～０４ ―― 42

本編

上

それはあるマンションの一室。

玄関からリビングに繋ぐ廊下には夥しい血のカーペットが敷かれている。

その日２０歳を迎えた彼女は扉に背を預け、腹部から血を流している。息も絶え絶えで今から救急車を呼んでも助からない事だけは明確だった。

愛と言う名の嘘を使いこなし、哀しき過去を持つ・・・ 愛を知らぬ少女は偶像となり愛を振りまく存在となった。

秘密主義のミステリアスな彼女は齢１６にて双子を生み、世間を騙して偶像として活躍し、タレントとして出世街道邁進中。そんな時期だった。

母としての幸せ、アイドルとしての幸せ、その両方を欲した彼女は両方得ることが出来た。幸福を噛み締めている最中の出来事だった。

熱狂的なファンがある協力者によって尖兵として仕立て上げられ、彼女の道を終わらせる。

確かに彼女はその壮絶な育ちから、『考えるより先にその場に合わせた行動をとる』という見る人から見れば愚かな、自業自得とも言える行動指針を持つ人間であった。

しかし、彼女が亡くなった事に関して納得ができるかと聞かれれば答えはＮｏだ。

液晶に映る一連の流れを見た『ある人間』は涙を一滴流した。これまでの人生でドラマや映画、アニメを見て涙を流したことの無いソレは確かに一滴涙を流した。そして何が関係したのか、ソレはその場で倒れて動く事は無くなった。

「ふむ、強い憤りが自らを死に追いやったか。人間という生物は時折面白い反応をするじゃ無いか。やはりまだ捨てたものじゃ無いな」

姿の形容できない存在は楽の感情を浮かべて微笑を浮かべる。

「そこまで強い心残りになるというのであれば貴様の大事なものをいくつか貰うとしよう、それで良い結果を齎そう」

微笑は嗤いに変わり、手の様なものを虚空で数回振る。

すると先ほど倒れたソレから淀んだ光の玉が飛び出して謎の存在の手に収まった。

そして何かを引き抜いて、その代わりに眩い光を放つを一つ差し込んで淡く光る玉にした後、真下に投げた。

それがどこに向かったか、有象無象の我らには理解の及ばないものだろう。

☆――――――――★

「…　あれ…　？」

濃紺と間違える様な黒髪の少女は、瞳から一筋の涙を流していることに気付く。

「疲れてるのかな…」

天気予報を見ている最中に涙を零す彼女は、何か大事なものを忘れている様な気がして思考の海に意識を沈める。

別世界の様な空間にはデスクトップパソコンがあり、画面はブラウザの検索画面が表示されており、検索ワードは

【自身　重要な記憶　使命】

三単語が並んでおり、一人でにマウスカーソルが動かされ検索される。

検索結果がそのまま記憶領域に流し込まれる。この検索結果に間違いは一切無い。脳とは別の記憶領域に情報は保存されており、世界の心理すら知ることのできるその能力は無意識で発動される。

「あぁ…　そっか。あの光景を守らないとだ…　ね…」

意識が元に戻り次第、淀んだ緑色の瞳は輝くエメラルドの様になり、歪んだ菱形の模様が浮かび上がる。両目に星を浮かべて口角を上げる彼女はどこか、最近話題になっているアイという芸能人に似た容姿をしていた。浮かべる笑顔は見たものすべてに寒気を感じさせるほどの不気味さと空虚さを感じさせるものではあったのだが、彼女しかいないこの場では誰も指摘するものはいない。

ゆったりとした部屋着を脱いで外行きの服に着替えて、長い髪をポニーテールに結んでマスクをつける。万札を二枚ほどポケットの奥に突っ込んで虚空を見つめる。

再び検索画面。

感覚でキーボードを打ち込んで検索を行う。

【星野アイ　――――】

色々と調べた後、意識を元に戻して動き出す。

星野アイと瓜二つの少女。夜風　紅羽の行動指針はたった一つ。

『星野アイの殺害を阻止する』

その一つに集中する彼女は、瞳の歪な星を妖しく輝かせて外に踏み出す。

下

外に出て目的の場所にまっすぐ向かう。
この姿は星野アイに瓜二つの様だが、それをはっきり認識できるのは自分と加害者のみ。他は雰囲気が似た容姿の良い少女としか認識できないだろう。
だからこうして変装をする事なく意気揚々と街を練り歩いても本人には一切迷惑はかからない。それでも星野アイ要素を認識できなくても容姿が整っていることには変わりないので周囲から集める視線は少し多い。私の行動を阻害しない限りはどんなに見てもらっても構わない。
電車を乗り継いでタクシーも使用して彼女達の住まう場所へ向かう。
私が起こす行動は指針で決めた通り対象の護衛、加害者の鎮圧及び・・・ 場合によっては殺害。我ながら倫理観はどこに捨てたのか不明な考えだが、この身を犠牲にしようが必ず達成する覚悟でいる。
自分の中で燃え上がる炎を押さえつけて、冷静であろうとするために静かに深呼吸を行う。怪しまれない様に頬杖をついて窓の外を見るというアクションの中に含ませる。
目的地に着いた。
怪しまれない様な自然な動きで堂々とした姿勢でエントランスのセキュリティを他の住人の後に続くという形で突破する。
フロアは既に調査済み、他の住人を先に行かせてから一人でエレベーターに乗る。不可思議な力を記憶を代償に手に入れて、新しい体を得た第二の人生。
始まってからまだ三日程度しか経っていないが、ここで終わらせる気で臨むというのは贅沢すぎる命の使い方なのではなかろうか。
前世含めて上流階級のような生活はしたことないが、唯一この命の使い方だけは彼らにすら勝る部分だと思い、不思議と笑顔が浮かぶ。エレベーターのガラスに写る最強のアイドルの笑顔は紛い物であろうとも、紛い物自信を虜にしてしまいそうな破壊力を誇る。そして同

時に彼女の最期がフラッシュバックして悪寒とともに表情が無表情に戻るのがわかった。
フロアに到着して、物陰に隠れる。
ここからが賭けだ。力で勝てるかどうかで言えば勝てない。しかし、瞬間的に対処法を検索して実践をすれば十分に勝機がある。
・・・いや、待てよ。
このまま彼女に何も知らせずに鎮圧してしまえば彼女は再び同じ過ちを犯すのかもしれない。そうだとしたら今回の私の行動が水の泡だ。
ならどうする？
アイを危険な目に合わせるのは身が分かれる思いだが、再来があるのもそれはそれで困る。ならば加害者がインターフォンを鳴らしてアイが玄関から出てきて一言かけられた瞬間で取り押さえる。うん、それしか無い。
失敗した際のことを考えると体の震えが止まらなくなるが、成功以外の結果を私は認めない。これが自己中心的な行動だとは分かっている。しかし、これはいくつもある世界線が一つ増えるだけに過ぎない。他の世界線ではアイは殺されるのだろうし、私のいた世界での流れも変わることはない。この世界で起こる私自身が起こす世界を変える行動。ちっぽけな私が超常的な存在に会って力を得て、世界を変える。なんて素敵な人生だろう。
私の歪んだ自己愛に潤いをもたらすために悲劇を無くす。それだけの話だ。
少し待つと事件発生数分前になる。
エレベーターがこのフロアに着くと例の男が白い花束を持って出て来る。うまく花束の陰にナイフを隠しているのだろうが何度も見た私には誤魔化すことは出来ない。
息を吐き出して止めることで心拍数を抑え気味にして無理矢理緊張を解す。
そして奴がインターフォンを押した。
私は気配を消した上で彼の近くに寄った。

玄関の扉が開かれてアイが出てくる。今から何が起こるのか全く予想できていない様子で、そんな顔の彼女もまた美しい。
見惚れそうになるのを舌を噛むことで我慢して、タイミングを計る。
一言話して花束を押しつけ・・・ 今ッッッッ!!!
気配を急に現してアイとナイフの刀身の間に左手を差し込む。
手のひらというのは骨の集合体なもので、あまり距離が付いていない、威力がそこまでない刺突攻撃であれば簡単に貫通することは出来ない。
刀身が手を突き破る痛みに筋肉が固まりそうになるが、神経に干渉して人間の反射行動を無効化する。
加害者は急に現れたもう一人のアイに驚愕の表情を浮かべていて、そんな間抜け顔を晒している人物に向かって勢いのまま体当たりと背負い投げのコンボで相手を昏倒させる。
相手が気絶したことを確認すると深いため息とともに一息つく。
「ふーっ・・・、お嬢さんお怪我はありませんか?」
痛み止めのためにアドレナリンを過剰分泌させているためか、言動がおかしくなるがまだ普通の範囲内のはずだ。
「え・・・・・・・・・」
アイは呆然とした様子で固まっており、思考回路がストップしてしまっているようだ。
(流石のアイでもこんな状況をすぐに理解することは出来ないか・・・)
アイドルであって非日常に身をおいているわけではないのだ。そんな状況をすぐ受け入れる人間の方が珍しい。
私だっていきなりそんなことに巻き込まれたら同じような反応になるに決まってる。
腰に巻きつけておいた上着を裂いて、両手両足をきつく縛る。手にナイフが刺さっているので作業しにくかったがしっかり捕縛できた。
ついでに警察に通報を行っておく。これで数分で警察が到着するだろう。
☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

サイレンの音と共に警察が到着して、警察官にすら左手の有様を見られてギョッとされたり事情聴取を受けたりして結果的に解放されたのは21時過ぎだった。
夜空に覗く月に左手をあててみる。
包帯でグルグル巻きにされている中で治癒力をそこに集中しているため、通常の4倍程で治るだろう。
気や霊力等を使ったりすればさらに早く治せるのだろうけど、1日にいくつも知識を増やすと凄まじい頭痛が発生するのでこれは我慢する他ない。
もうアドレナリンは分泌していないため、神経を操作することで局所的に感度を鈍らせて痛みを軽減している。
ちなみに事情聴取の際は通りすがりという事を押し通した。アイからしたらこちらも住所を知っていることに対して不審に思って警戒度を高めてくれると嬉しい。
作戦は大成功、これからは星野一家の活躍をテレビや配信サイトにて見守っていこう。
・・・ あ。
「そういえば、これから先どうやって路銀稼ごうかな・・・」
唐突な現実的問題が私を直撃する。
「動画サイトでも始めてみるか・・・ ？」
色んなオカルト的な力でマジックとかもできるだろうな。
蛇足だけど斉藤社長に凄い感謝されてお礼の品を渡してきたのだが、あくまで自己満足なので丁重に断っておいた。彼と会うことも2度とないだろう。

署内にて
派遣された救急隊員の前でナイフを思い切り引き抜いて血がダラダラ流れ出る様子を見せて怒られるという一幕があった。
大切な記憶について
大切な記憶となっているが、抜き出された＝最初からなかったことになっているので本人的には大して問題にはなってないです。

少し自己愛が歪んで肥大化したってくらいで自分から犯罪を起こす人間ではないです。多分、ｍａｙｂｅ。

番外編（キャラ崩壊・強いご都合主義・オリジナル展開等）
絶対にありえないストーリー　ｅｐ０１

【クレハとアイ】
「……」
おそらく今の私は薬を飲み込もうとして失敗して口の中で錠剤が溶け始めた時のような渋い表情をしているだろう。
その原因は目の前にいる人物だ。
艶やかな黒髪に夜空のような紫系の瞳の色。更にその瞳には６角の星があり、周囲には広大な宇宙に散りばめられた星々を想起させる、視界を確保するための器官ですら美術品に引けを取らない。もちろんそれ以外のパーツも整いすぎており、ボディや立ち振る舞い、オーラでさえも全てが圧倒的な魅力を秘めている。
目の前にいるその人物に若干私が気圧されているのがその証拠だ。
彼女と似た容姿でこの世に生を受けたが、私のエメラルドの瞳に乗っかっている十時星はいつもより小さくなっているのではなかろうか。
目の前にいる人物、星野アイはその瞳の星を燦々と輝かせており、彼女自身から発せられるオーラは強まるばかりだ。
（あぁ…　このまま気絶できたらどんなに良いことだろうか…）
しかしいつまでも黙っているようじゃ状況が進まない。
近くにいる斎藤社長や社長夫人もこの邂逅に固まっている。別にだるまさんがころんだをやっている訳じゃないんだよ私達は…。
「あの、アイさん。一体どうされたんですか？」
私が恐る恐る疑問を口にすると、星野アイは瞳をか輝かせたままとんでもないこと…　私のこれからの生活の方針が思い切り変わる可能性のあることを言った。

「私と一緒にアイドルやろうっ！」
「え、嫌です」（即答）
「え～っ！つれないな～！」

何故こんな紛い物にそんな提案をぶつけてくるのかが理解できなかった。
これまでの人生経験でもそれなりに突飛な提案をする人たちには関わってきたが、流石にこのレベルのものは経験してない。
アイドルとして究極の才能・究極の容姿・強靭な精神を持っている星野アイに対して、私の場合はちょっと優秀程度の才能・究極の容姿の劣化コピー・平均より少し強いだけの精神という中途半端なものであってその中の一つは記憶を代償に、ズルをして得たものだ。
ズルをしても自然な才能には到底及ばない。
星野アイと夜風紅羽は全く合わない。月とスッポンなんて言葉があるがそんなレベルじゃない。控えめに言って銀河とミドリムシだ。
なのでこうして即答で断った訳だが、当の本人は文句を言いながら不服そうな表情を浮かべている。かわいいけど駄目ですよ。
そしてフリーズから復活した斎藤社長は何かを思いついた顔をして、一瞬で真剣な顔になる。私の中の嫌な予感が急激に膨れ上がる予感がした。

「夜風紅羽くん、アイドルやってみないか？」
「いえ、だから駄目ですって」
「理由を聞いてもいいか？」

私に何かを感じたのか知らないが食い下がる斎藤社長に私の考えを口にする。

――――
――――

斎藤社長や星野アイと論戦を繰り広げて体感４０分。
社長夫人の表情に目立った変化はないが心境としてずっと立ちっぱなしなので何かしら思うところはあるはずだ。
私は相変わらず二人が私に何を求めているのかわからないのだが、私としてもそう簡単に芸能界に深く関わりたくはない為、ある程度まともな代案を出す。

「・・・ でしたら、私が苺プロダクションの所属タレント等の護衛でもやりましょうか？武術の心得はあるので。数日前のような事が再び起こらないなんて保証はありませんし・・・。どうです？」

もちろん採用されるなんて思ってない。
比較的まともな提案かもしれないが、おそらく却下される。そしたらこちらが話をぶった切って帰宅する。
それで万事解決だ。考えなしの力技だが、何も思いつかない身としてはこれしか案がない。
馬鹿に思われるのも好都合だ。私はそんなに聡明じゃないぞ、ふふん。
あと武術の心得すらもズルで得たものだ、全く誇れないぞ！

「うん、いいと思う！」
「よし、話はまとまったな。契約書や諸々の確認をしたいから事務所についてきてくれ」
「えぇ・・・ ？」
私の頭の中は『？』でいっぱいである。
やはり星野アイと斎藤社長の求めている事がわからない。
アイドルと護衛（ボディガード）なんて全く違う次元の話じゃないのか？
何か助け舟を出してくれるかと期待して社長夫人を見ると、露骨に視線をそらされた。なんか泣きそう。

超短編　Ｎｏ．０１

【究極故の怖さ】

能力で半降霊術というものを見つけた。

これは死者の魂を呼び出して体に宿すが、主導権は自分にあって、能力のみ引き出すというもの。

そこで別の世界線の星野アイを呼び出した場合どうなるのか非常に気になるのだ。

試しにやってみるか。

姿見の前に立って…　来いッ!!

念じた瞬間、重い何かが自分に入ってきて脳が揺さぶられたかのように気分が悪くなる。

歯を食いしばって目の前を見ると十時星ではなく六角の星を宿したエメラルドの瞳がそこにあった。

あ、鼻血出てきた。

流石に身の危険を感じたので術を解除してしゃがみ込む。

きゅ…　究極の代償はやっぱり重いな…。

半降霊術は封印することにした。使い道も全くわからないので使ったところでどうしようもない。

鼻血はすぐに収まりました。

【ちょっとやってみる】

自分の能力では天地がひっくり返ろうとも星野アイには勝てない。

だが、アイドルに誘われて断った後、個人的に歌って踊るという経験がしたくなってきたので、声の出し方の技術を得て試してみることにした。

場所は変わってレンタルのダンススタジオ。

苺プロダクション内のダンススタジオは星野アイにかち合う可能性があっても困るのでここでやる。

まず発動させるのはアイドルの才能と声楽の才能、ダンスの才能。

曲と振り付けは記憶術を存分に使って短時間で覚えた。

撮影機材を置いてカメラをインターバルで撮影開始する。
スマホを壁に立てかけて【〇〇〇〇〇】のオフボーカルを再生する。
動きや笑顔のタイミングはトレースだが、声ややる人間が全然違うため、星野アイの歌ってた曲とは全く違うものに感じる。
他の曲もやってみたりした。
踊りや歌自体はとても楽しく、私の動きを撮った動画もいい感じではある。
しかし、やはりそれだけだ。
アイと比べてしまえば最早それは空虚そのもの。
あの時の誘いを断った判断は何も間違っていなかったという事だ。
とはいえこういう事をするのは好きだということがわかったので今後は別のアーティストの曲とかに挑戦してみようと思った。
後日
「やっぱり一緒にやろうよっ！興味あるんだよね？ねっ!?」
「いや、やら無いですって」
「え～！アイドル楽しいよ～？」
「そういう問題ではなくですね・・・」
事務所内で同じ動画を見て容姿の良さに口角を上げていると、アイがどこからともなく現れて再び勧誘の雨を喰らった。
どうやらイヤホンジャックがしっかり刺さっていなかったようで、私の歌声が垂れ流しだったようだ。次からは再生する前にしっかり確認しておこう。

【星野アイとお酒】

「ドーム公演が無事終了した事を祝ってかんぱーい！」
斎藤社長が乾杯の音頭をとる。乾杯と言っているが既に顔が赤みがかっているので1杯目ではなさそうだ。
「「乾杯！」」
アイとミヤコと紅羽がグラスをコツンと軽くぶつけた。コップに入った丸い氷がグラスのフチにあたってカランと音を立てる。
グラスの中にある液体をテレビで見たＣＭをイメージしてグビッと飲み干そうとするアイ。紅羽はそれを見て慌てて止めた。
「アイさん、ちょっと待って」
「ん？どうしたの？」
アイは疑問符を浮かべて何故止めたのかを伺う。
「アイさんってお酒飲むのは今日が初めてですよね？」
「うん！そうだよ？」
「では一応、最初の一杯はゆっくり飲んで行きましょうか。お酒の耐性がわからない上でゴクゴク飲むのは危険なので・・・。とはいえ、私も今日が初めてなので私と同じペースで飲んでみましょうか」
クレハがアイの身を心配して提案を告げるとアイが不思議そうな表情を浮かべた。
「クレハも今日が初めてなの？」
可愛らしく首を傾げながらアイが問う。
「はい、成人は数ヶ月前にしたんですけど飲むタイミングがなかったので今日が初めてということなんです。さぁ、飲んでみましょうか」
「うん！ちょっとドキドキしてきた～」
二人が改めて小さく乾杯して小さく一口含んだ。
余談だが、テーブルの上にはいくつかお酒が並んでおり、ワインやシャンパンだけではなく、日本酒も並んでいた。その中で甘くて飲みやすい大吟醸がアイとクレハのグラスに入っている。
口に入れると奥深い甘さが口一杯に広がり、フルーティーな香りで幸せを感じさせる。

二人はその一口をしっかり味わって飲み込んだ・・・ 筈だった。
「思っていたよりも甘くて飲みやすいですね。でもこれは調子乗って勢いよく飲んだら良くなさそうです」
とクレハは調べた情報と自分の感覚を照らし合わせて、一息ついた。
「どうですか、アイさん。アイさんはお気に召しましたか？」
とクレハが自分のグラスを見ながらアイに問う。
「・・・・・」
「あの・・・ アイさん？・・・ うわ」
返答のないアイを不審に思い、顔を向けて再度声をかけようとしたところでクレハの表情が固まった。
「あまくておいひい～♪」
アイは顔を火照らせていつもよりも気が抜けた口調でポワポワしていた。
瞳の星は燦々と輝くが、光の強弱がリズム・・・ ビートを刻んでいるようで、踏切のランプを想起させる。
大きな星の周囲に広がる星空もオーロラが掛かったように存在感を顕にしている。
「えぇ・・・ ？」
紅羽は若干体が火照る感覚があったものの、アイの状態に困惑して火照りは嘘のように消えた。（無意識でアルコールを浄化しただけ）
そしてアイの持っているグラスは空になっており、先ほどした忠告は早速無視されてしまったようだ。
実際は味わっている時間が違かった。
クレハが1分くらい口の中でお酒を転がしていたのに対してアイは四十秒ほどで飲み込んで次に次にとクピクピ飲んで行き、最後の一口とクレハの長い味わいの最初の一口が重なった。それだけの話である。
幸い、アイの飲むスピードが遅かったのでまだ一杯目で済んでいる。
アイがふわふわした状態で大吟醸の瓶に手を伸ばしてグラスに

並々注いで再び飲もうとグラスを口元に運ぶ。
「ちょちょちょ・・・、アイさん早い、早いですよ!・もうちょっと時間開けないと危険なんですって!」
紅羽は焦った様子でアイの飲酒を止める。再び無意識で念力を行使しているのに気付いていない。
「むぅ〜・・・。あっ!・クレハだぁ〜!・ヤッホーっ!・」
アイは勢いよくクレハに抱きついた。その行動が発生する前に紅羽はグラスをテーブルに置いた。
「絡み酒・・・」
絶対にメディアに出してはいけない秘密をもう一つ目にしてしまったクレハはほんの少しだけ気が重くなった。
アイはもう何が何だかわからなくなってしまっているようだ。いつもと違ってテンションの方向性もおかしい。
「ねぇねぇクレハっ!・次のライブは一緒に出ようね〜っ!・」
「でーまーせーんーよー」
いつもよりハイテンションなアイに抱きつかれながら体を揺らされるという何気に高度な事をされながら、クレハはいつも通りに答える。体が揺らされているので言葉も変に間延びしたものになってしまう。
「もぉ〜っ!・ホントに付き合い悪いぞぉ〜っ!!」
「頼むから落ち着いてください・・・」
「じゃあ、何か約束して!・」
「あーはい。ライブとかは無理ですけどレッスンスタジオでの練習なら付き合いますから・・・」
「よーしっ!・絶!・対!・に!・約束だぞぉ〜・・・　むにゃ・・・」
寝落ちするアイに「やっと治ったか」と嘆息するクレハ。そして今後も同じような事になるのかと思い、げんなりした。
後日
「アイさん、一応パッチテストやっておきましょう」
「オッケー!・ドンと来いっ!・」
アルコールシートを腕に押し付けてから離す。

「…」
「…？…♪」
クレハは観察に集中して黙り込む。
アイはそんなクレハの様子を見て何かがおかしいのか楽しげに笑顔になる。
しかし、アイの肌は赤くならなかった。
「あれ…？弱いわけじゃ無いのか…？」
「ねぇ、クレハ？」
「はい？どうしましたか？」
「約束守ってね？」
「!?…　えぇ、もちろんです」（怖っ！というか寝落ちしときながら記憶はしっかり残ってるのか…）
有無を言わさない口調のアイの瞳の星が黒く見えた紅羽は若干怯えながら返答した。

休息シリーズ　01

【星野アイと謎生物】

「オゥワァ～」

「ッ～～～／／／いつも最ッ高にかわいいよっ！カノープス～！」

私の目の前に寝転がっている謎生物との出会いは今から二年前。

当時、アイドルを始めて二年経った私はメンバー間で感じる格差や、軋轢に少し辟易していた。

原因はどう考えても私なんだけど、だからってわざと人気を落とすわけにもいかない。

メンバー間とも仲良くしたいけど、それを解決するには本来の目的である人を愛する事を控えなきゃいけない。

どうすればいいのかがわからない私はあまり良い状態とはいえなかったんだと思う。

そんな日の夜だった。

私の家の前に謎の大きなけむくじゃらが鎮座していたのだ。

真っ先に感じたことは困惑。

猫みたいな見た目をしてるけど大きさが猫では無い。大型犬よりも更に大きいソレは私と目があっても一切動きを見せなかった。

（とにかく今はこの子を退かさないと家に入れないよね・・・）

そう思った私は、とりあえず話しかけてみる事にした。冷静でなかった私は意味のない事をしてしまったのだが・・・。

「あのね？ちょっとそこどいてもらってもいいかな？」

「オゥワァ・・・」

その生き物は私の意図を汲んでドアの前から退いてくれたのだ。

この光景から私の脳裏に電流が走った。同時に胸あたりにも暖かいものを感じた。

犬でも猫でもない正体不明だけど賢い生き物。大きいけれど無気力系のその顔ともふもふボディに秘められた魔力。

そう、この子に会ったのは運命っ!!

あまり考えずにその場で行動を起こしてしまう自分にこの時だけ

は感謝したい。
「ねぇ、良かったらウチの子にならない？」
「オゥ・・・？」
その子は私の言った言葉の意味を説いているように思えた。だから私は分かりやすく言い換えた。
「私の家族になってくれないかな？」
「・・・オゥワァ～」
一瞬考えるそぶりを見せたあと、一鳴きして私にそのもふもふヘッドを擦り付けてくれた。
「・・・ッ！うん、ありがとう！」
私は家族が出来たことの嬉しさやこの子のかわいさに対する感情とかがごちゃごちゃになって、とにかくその子に抱きついた。

家の中に入れてリビングでその子と私は目線を合わせていた。
地べたに座るとその子の方が高いから私は椅子に座っている。
撫でようと手を伸ばすと、頭を差し出して素直に撫でられてくれる姿は見ていて自然と口角が上がってくる。
しかも気持ちよさそーに目を細めるのっ！かわいいしかないよねっ！
尊すぎる～っ!!!
因みにこの子の名前はカノープスっていう名前にした。
ホントは一番星に因んだ名前をつけたかったんだけどイメージに合わなかったから二番星のカノープスから貰った。
この子に会ってから私の生活は輝きに満ちた。
モヤモヤした事があればこの子に抱きついて息を吸えば、幸せな気持ちになれるし、ずっと抱きついていても全く嫌がるそぶりを見せない。
私の追求していた愛ってこういう事だったんだなってわかってからカノープスがより愛おしく感じちゃって、その時アイドル業が乗りに乗っていたんだけど一緒にいる時間を確保したくてつい辞めちゃった☆

カノープスの黒いモフモフボディを撫でながら今日も囁く。
「カノープス、愛してるよ～♪」

謎生物
名前：カノープス
どう見ても黒猫だが犬みたいに座った時の全高が１ｍ５０ｃｍするとかいう、あまりに大きすぎる謎生物。
もふもふボディとプニプニ肉球、気だるそうな雰囲気がチャームポイントの生き物。
なぜあの場所にいたかは不明。
知能が高く、忠誠心が高い。
大きさ以外は猫と犬のいいとこ取りをしたハイブリッド生物。
主人の危機を察知すれば異様な素早さで主人の元へ現れる。
普段は収納されていて見えないが鋭利な牙や爪を持っている。緊急時だけ飛び出る。
鳴き声も形容しづらい低い鳴き声で聴く人によれば気持ち悪いと思われる。アイはソレもチャームポイントだと思っている。
雑食動物だが、どちらかというと植物を好む。図体が大きい割に少食だが、よく動いた後はそれなりに食べることもある。
光合成をしていたりとおかしい点はあるがアイは一切気にしていない。
寿命は最低でも６０年だが、基本的に主人に寿命を合わせることが多い。
ほんとなんなんだこの生き物。

星野アイのアイドル引退時期は１６歳。
現在はつべで個人チャンネルを運営している。
将来、アイドルオーラを駆使して莫大に富を得る事はまだ誰も知り得ない。

休憩シリーズ　０２

【紅羽の買い出し】

殺害阻止成功の翌日。

私はあたりめを加えてテレビを見ていた。

報道番組では昨日のあの出来事が特報で出ていた。

「そりゃ、食い付くか。結果がどうであれ格好の餌だもんね」

マスコミがハエの如く集る姿が容易に想像できる。

背を預けた座椅子の背もたれが軋む音が部屋に反響する。

案外煩いなこれ。

視線をずらして姿見に映る私を見る。こんな自堕落なポーズでも絵になるのって本当に凄いよなぁ・・・。

陳腐な言葉でしか表せないのがちょっと悔しいな。自分自身の語彙力の無さに若干嫌気がさした。

（不機嫌気味な表情もかわいい・・・）

こうして事あるごとに視界に姿が映るたびに見惚れるという事が無ければ更に良いのだろうが・・・。いずれ治るかな？

１２時間ほど前まで赤黒くに染まっていたガーゼや包帯は既に無く、左手は傷跡を残さずに刺される前の綺麗な手に戻っていた。

日付が変わった時点で頭痛が綺麗さっぱり無くなったので気を操る術を手に入れた。さっきまですっごい集中していたせいで疲労のたまりがすごい。まるで身体中に重りをつけている気分。

時刻はちょうど午前９時。そろそろスーパーマーケットも開店時間なんじゃないだろうか？

家にまともな食料が残っていないという事実に気付いたのはついさっき。

あたりめを開封して一切れ咥えた瞬間、パッと思い出した。

そしてお腹の虫が一時間ほど前から鳴きまくっている。

あたりめで誤魔化すことは出来なさそうなので買い出しにでも出かけるとしよう。

「よっこらほいっ」
独特な掛け声で膝に手をついて立ち上がる。
空腹状態のせいか力が抜けたような足取りでクローゼットに向かう。
近くに出かけるだけなのでいくつかある中で真っ先に目についたものを着る。
無地の白いTシャツに灰色のフード付きパーカー、そこにジーンズという容姿を活かさないスタイルだが着飾ったところで何の意味もないため、これでいく。
首と髪の間に手を入れて押し上げるようにして髪を服から出す。
夜を想起させる青みがかった黒髪が広がる。
使っているシャンプーとは別の香りがするのは少し不気味で怖いところではあるが、そういうものなんだろう。
白いシュシュを咥えて後ろ髪を手で集めて、うまくまとまったところでシュシュを着ける。黒いキャップを被って想像通りのスタイルになると自然と満足げな表情になる。
長財布の入ったリュックを背負って支度が完了する。
最後にテレビの電源を落として外に出る。
鍵をしっかり締めてから空を見上げる。
そこには晴天の空があり、清々しい気持ちで道を歩き始めた。

あれから安めの食品を購入して大きいリュックに詰め込んだ帰り道。
トコトコという擬音がつきそうな歩調で歩いていると駅前で路上ライブを行なっている人たちを見かけた。
(楽器を鳴らして歌を歌って・・・ 芸能の世界を目指す人って強い心を持ってるなぁ)
勝手な憶測と自己完結した価値のない独り言を心に秘めて再び空を見る。
人間がどんなに頑張り、苦労をしていたとしても自然は知ったこっちゃない。

人々を照らす太陽は、どこから湧いて出てきたのかわからない暗めの雲に覆い隠され、曇天模様だった。

絶対ありえないストーリー　ｅｐ０２

【苺プロダクションの逸般人】

そのまま車に乗せられてらん豚の如く出荷・・・ ではなく事務所に向かった。

心境的には『そんなー（；・ω・、）』って感じだった。

隣に座ってた星野アイが私に凄い話しかけていたが、どう返答したか全く覚えていない。

見守るの見がどこかに旅立ってしまい。私は自分で自分の逃げ道を塞いでしまった事を後悔した。

事務所にて発行された契約書に不備がないか隅々まで確認する。

斎藤社長の事だから万が一にも後ろ暗いことは無いだろうけど、これは私が私であるための行動でもある。

皆も契約書はしっかり端から端まで目を通して理解してからサインをするんだぞ。私との約束だ。

なんの不備もないのでサインと印を押して契約成立となった。

契約成立したからには全力で守るぞ。契約を違えない、これ大事。

こうしてプロダクションに雇用されたのだし改めて自己紹介を行なっておこう。

手首にあったゴムで髪をポニーテールにしてからスッと立ち上がって

「では、改めて。苺プロダクションで明日からボディガードの任に就きます。夜風紅羽です。誠心誠意勤めさせていただきますのでよろしくお願いします」

定型文に感情を込めて発してから一礼。

周りから拍手を受ける。ちょっと気恥ずかしい。

【初陣の日】

次の日、私は早速ボディガードとしてアイの仕事に同行していた。

格好はよくＳＰのドラマとかで見るパンツスーツ姿だ。この格好をしているのには理由がある。この体はかわいい。プライベートの

格好でいるともうボディガードとは思えないくらいでなんの威圧感にもならない。
なのでパンツスーツ＆ポニーテールだ。
流石に足への負担を減らしたいのでヒールのついた靴は履いてない。
若干鉄板の入った靴を装備しており、動きやすくて攻撃力も出やすいのでお気に入りの一品だ。
それはそれとして私はボディガードなのだが、纏うオーラが中途半端に強いため、芸能人と思われるのか二度見される事が多い。
その度にアイが嬉しそうにするのが不思議だった。
本日の仕事は、週刊レッドオーシャンというファッション冊子の表紙撮影と、今季の流行ファッションというコーナーで掲載するコーデの撮影だ。
以前アイが請け負った週刊プレイボーイの表紙についても大きな宣伝効果を生むので今回のは渡りに船というものだ。
現状で、アイの知名度はとても高いが、それでもまだ流行りの一人という枠だ。芸能界の地位をより強固にする為にはどんな有名でも気を抜かずに宣伝を続けて人の目に留まり続ける必要がある。
私の言っていることは当たり前なのだが、それを出来ずに消えていく人達は物凄く多い。数年前に流行った俳優で、現在もメディアで目立っているのは何人いるのか？それが答えだ。勿論、俳優だけではなくアイドルや芸人等も含む。
時代のおかげである程度輝いてテレビで売れなくなったら動画サイトの方で稼ぐという道ができているのは幸いだが、今はテレビや雑誌、映画など表のメディアで目立つ事が大事な筈だ。
Ｂ小町の格差もより激しくなってはいるが私としても特に言えることはないので見守ることしかできない。
さてさて、そんな事考えている間に撮影が開始される。
あの刺客を差し向けた人間は計画が失敗した場合の行動が不明の為、撮影スタジオでも警戒する必要がある。
犯人が自分で殺しに来ることは恐らくないだろうがまた刺客を

送ってこないとも限らない。
本来であれば周りに適度な殺気をぶつけて威嚇しておきたいのだが、それだと撮影スタッフ等の集中力が散漫になってしまい、撮影が滞ってしまうと言う問題が発生する。
なので己の動体視力を極限まで高めて周囲をじっくり見回す事で即座に反応する監視カメラとなる事で、警戒態勢をとっておく。
それだけであれば比較的に楽なのだが、モデルがあのアイだ。
いくらカメラだけに能力が集中するとはいえ、その余波はこちらにも及ぶ。
大きな星の引力に吸い込まれる小惑星のように視線が流されそうになる。
そうならないように神経や電気信号を操作したり思考回路の使用量を制御して抗う。
正直アイのボディガードで一番疲れるのはこの抗うという行為だ。
少しぐらい気を抜いても良いんじゃないかという意見もあるだろうが、先程の理由で油断なんて出来たものじゃない。
既に過干渉に過干渉を重ねているので何が起きても不思議じゃない。
だから私は常に全力でアイを守る。
突っ立っているだけであれば退屈以外の何者でもない時間だが、こうしていると時間がたつのもあっという間で数十枚程撮って、表紙の部分が終了した。
一旦３０分の休憩時間が入ったのでアイと合流し、撮影スタッフの方に軽く頭を下げる。
休憩室・・・ といってもよくある楽屋なのだが、そこに着いて扉を閉めるとアイは椅子に座ってからため息をついた。
「アイさん、もしかして睡眠不足ですか？」
「ううん、違うよ？なんで？」
「いえ、なにかお疲れのご様子でしたので・・・。アイさんでしたら撮影で消耗する方とも思えませんし」
「いやー、ホントはじっとしているのってあんまり得意じゃないんだ

よね。ていうかクレハなんか堅くない？」
「ええ、それは業務中ですので。今の私はあくまでアイさんのボディガードです。護衛対象に雑な口調をすることはありません」
「真面目だなぁ」
「契約を結んだ以上は全力で履行する。人間として当然のことをしてるだけですよ。あまり難しく考える必要はありません」
アイが複雑な感情を込めた表情を見せるがそれが嘘で固めたものなのか、それとも真なのか今の私にはよくわからないが、休憩時間なのだから変に疲れることはしてほしくないな。
そうして楽屋内は気まずい沈黙で包まれる。
アイさんは私にじっと視線をぶつけ続けており、私としても気が気でならない。
「……」
「…… なんでしょうか？」
このままでは休憩にならないと思った私はアイさんに問う。
「こっち来てお話しようよ」
「私は業務中ですので、それを放棄することはできません」
「… 紅羽ってもしかして私の事嫌いなの？」
「なっ!?そんなことは…」
「なら問題ないよね！それに近くにいた方が守りやすいんじゃない？」
「… それは盲点でした。わかりました、私の負けです」
「やったっ！あのね、昨日アクアとルビーが――」
結局アイさん喋りっ放しだったけど、休憩出来たのだろうか…？
あの後も、特になんの問題も起こらず無事に仕事を完遂出来た。
慣れるまで時間がかかりそうだと予想してたが、この調子ならば一週間でなんとかなりそうだ。

供養作品　二作目　【二番星】０話

幼少期の私はそれなりに空虚な人間だったんじゃないかな？
私が生まれたのは私含めた3人構成の上流家庭。両親は仕事が心の底から大好きなようで私に構ってくれる時間はほとんど無かった。
それでも生活の上で必要なものは全て用意してくれるし、私の両親的にお金は愛という感覚だったのかも。
私自身、寂しいと感じたことはないから満足していたんだと思う。
私が少し変わった人間だと自覚始めたのは就学前教育範囲を家庭教師から教わっている時だった。
その時家庭教師は将来の夢というお題を出してきた。あまりテレビにも興味がなくて家族で出かけることもない。友達はまずいない。そういったことから当時の私はあらゆる経験が乏しかった。
何かに強い憧れを持ったことがないからわからないという事を家庭教師に伝えると、少しの間を置いて
「アイちゃんは賢いのね～」
と何故か褒めてくれた。
家庭教師が帰った後、パソコンで将来の夢について調べてみると、私ぐらいの年齢だと何かしら持っていることが普通らしい。
「私って普通の人間じゃないのかな？」
なんて一部の人が聞いたら大いに反応しそうな独り言を零したのをよく覚えている。
別にあれは中二病ではなく、純粋な子供が思ったことだからセーフだ。
そうして私は将来の夢を探すために色々な習い事を始めた。考えつくものは片っ端からやった。
結果だけ言うと、特技が増えただけで夢はかけらも見つからなかった。どれも高いレベルの才能を持っていたらしいが、私からすると全く魅力的に思えなかった。
ホント懐かしいな。迷走し続けた結果なんのせいかも得られてないなんて経験、そうそう味わえるものじゃないよね。

目的とは違う技能ばっか身について苛立った時もあったけどそれのお陰か、感情を隠す技術も修得したんだよね。
使い所が難しいという難点もあるんだけどね・・・。
そんな迷走から数年の時が過ぎて小学４年生の時、遂に私の夢が見つかった。
きっかけは誰にでもあることだと思う。小学校の音楽鑑賞会でシンガーソングライターが呼ばれた事だった。
その人は当時あまり有名だったわけではないけど、その人の曲、歌、踊りは、私の心に響いてドス黒く錆びついた感情を呼び覚ました。
私が感動で涙を流したこともその時が初めてだった。
そこで過去の習い事でやっていなかった分野を思い出した。音楽だ。
再び親に音楽系の習い事をしたいといえば、頷いてピアノの教師を雇ってくれた。幸いにもピアノは既に家にあった。
過去に母親が興味本位で購入したものの、結局使わなくなったらしい。そういった面でも私の家庭はセレブなんだなと改めて思う。
思いつきでグランドピアノをポンって買えるのは常識外だと思う。
私の才能というものは楽器にも作用することはなんとなくわかってはいたがピアノでさえもその通りだとは思っていなかった。習ったことはスポンジの吸水並みにすぐ身について、怒涛の勢いで上達していった。
ある程度上達して、基本と言える部分は完璧なので習い事を辞めた。ここからは日々の鍛錬とインターネットやテレビを使って売れている曲の分析に入った。
しかし私はその時点で取り組んでいることが間違っている事に気づいた。
私の目的は売れることではなく、私が魅せる歌、曲で人を感動させることだ。
売れることは副次的のものでしかない。
お金を稼ぐという点だけでいえば他にも選択肢はたくさんある。
作曲や作詞に挑戦していたらあっという間に時が過ぎて中学校に

入学していた。

超短編０４

【倉敷藍の朝】

「うぅ、寒い。」

春も真っ只中なのに気温の上下が激しすぎるよ・・・。

昨日ちょっと暑かったから薄着で寝たら、この有様だし。

いや、わかってたよ？

天気予報で明日は寒くなる見込みって散々やってたから分かってたけども。

それでも過ちを冒してしまうのが人間て者だと思うの私は。

リビングに出た私は朝食を作っている紅羽さんに挨拶する。

「おはよー、紅羽さん。今日も早いね～・・・」

「倉敷さんこそいつもより３０分も早いですね。・・・　あ、薄着で寝てたから冷えたんですか？」

「す、鋭いね。その通りだよ、高校生なのにこんなミスをしちゃうなんてまだまだだね」

「まだ、高校生なんですから大丈夫です。中には大人でさえ体温調節失敗する人もいるんですし、倉敷さんは同じ過ちは繰り返さないでしょう？」

「うーん・・・　繰り返さないとは言い切れないけど、何回も同じミスはしないかな」

「ならそれでいいじゃないですか、朝ごはんはもう少し待っていてくださいね。今出来たばかりのコーンスープでも飲んで体を温めていてくださいね」

「流石紅羽さん、準備いいね」

「もちろんです、プロですから」

夜風紅羽さん、最近一緒に住み始めたお姉さん。

私と似た容姿をしてるんだけど、瞳の色や雰囲気が違う。

今年で３０歳らしいがどう見ても私と同じ年齢に見えるのは本当に謎だけど、とても頼りになるお姉さんだということは間違いない。

紅羽さん特製のコーンスープはすごく美味しい。

市販のものに少し別の素材を加えて作っているらしいのだが、それだけでこんなに深みがあってまろやかな味に仕上がるのだろうか？
以前私も同じ工程と同じ素材で作ってみたが本物とは全然違う、市販特有の普通の味わいになった。
何が違うのかわからず聞いてみると、
「愛情・・・ですね」
と真顔で言っていたので、紅羽さんも冗談言うんだな～って意外だった。
愛情で味が変わるなんてあるわけないのに。
それにしてもさっきからすごい甘い匂いがしてくる。
今日はデザート系なのかな？いや、朝からそんな甘いものは紅羽さんでも作らないか。
そう思いながらテレビ番組を視聴していると
「さぁ、出来ましたよ。どちらがいいですか？」
「へぇ、今日は選択制か～。・・・ん???」
目をこすって何回か瞬きをして出されたものを見る。
「あの・・・。紅羽さん？」
「どうしましたか？」
「これ・・・どちらも朝向きじゃないと思うなぁ」
「そうですかね？好き嫌いは良くないですよ？」
私の前に差し出されたのは、生クリームとチョコソースがふんだんに使われているホットケーキ４枚重ねとショートケーキワンホールだった。
（これで好き嫌いってワード普通出るかなぁ・・・？）
紅羽さんと私で何か認識の齟齬でもあるのかもしれない。
「じゃあ、ホットケーキの方でお願いします・・・」
「想定通りですね。それでは頂きましょうか」
「アッハイ」（想定通り・・・？というか紅羽さんは朝からケーキワンホール食べられるのっ!?）
ともかくこのままボーっとしているのは作ってくれた紅羽さんに失礼なので、ホットケーキを食べ始める。

（これチョコソース市販のじゃないな…。苦味が強い。生クリームとホットケーキの甘さに合っていて全然クドさが無い）
時々疑問に思う。
紅羽さんってアイさんのボディガードなんだよね？
正直言って料理関係の仕事をしていると言われた方がしっくり来るんだけど。
（やっぱり紅羽さん、若いな～）
「ん、どうしましたか？」
「ううん、なんでもないよ」
「そうですか」
（…　え？ワンホールの７５％食べ切ってるんだけど…。早すぎない？まだ食べ始めて３、４分だと思う…　実際３分しか経っていないし）
一口が豪快でもなく、上品にさえ思える食べ方でこんな短時間。
ますます紅羽さんのことが分からなくなる。
とりあえず、今は思考を放棄してホットケーキを食べきることだけに集中した。
「ふぅ…　ご馳走さまでしたぁ～。紅羽さん、今日も美味しい料理をありがとう♪」
「ええ、倉敷さんも美味しく食べてくれてありがとうございます」
（大人の魅力とキラキラオーラが混ざった微笑みが眩しすぎる…！この人、アイドルとかやらないのかな？）
「やりませんよ？」
「うぇっ!?」
私の驚いた反応を見て紅羽さんが苦笑する。
「もしかして、口に出てました？」
「ええ、それはもうばっちり出てましたよ」
「あはは…」
「それにしても倉敷さんもアイさんと同じ事を仰るんですね」
「あれ？そうなんだ」
「はい、もう１０年前から…　あ、倉敷さん」

「え？」
紅羽さんが指差した先の時計は午前７時３０分を指しており、それを見た瞬間私はコップの中のものを飲み干して勢い良く席から立ち上がった。
今から出てギリギリセーフってところだろうか。
「教えてくれてありがとっ！行ってきます！」
「ええ、学校頑張ってくださいね」
「紅羽さんもお仕事頑張ってっ！」
今日も楽しい１日が始まる。

ルビー×アクア　台本形式　超短編０５

ルビー×アクア
要素：耳かき＆膝枕、吸引、変態、ヤンデレ
世界線：アイ生存＋事件が起こらない上にカミキが事故で他界他界。

ルビー「えへへへー♪お兄ちゃん♪」
アクア「いきなりひっつくな暑苦しい」
ルビー「折角かわいい妹が抱きついてるのにどうしてそんな反応になるのかなぁ？」
アクア「身内だしそんなもんだろう」
とはいえ、身内贔屓になるのかもしれないがルビーは最近アイにすごく似て来ており容姿は優れている方なのだろう。
転生初期はそっけない態度が多かったルビーだが、中学に入った頃あたりで態度が急に変化した。
俺からしてみれば些細なことでルビーにとっては重要な事、なので何が原因でこうなったかはわからない。
態度が変わったばかりの頃はまだ中学生になりたてということもあり、あまり気にならなかった。
しかし、高校入学を控えた最近でもそのひっつき具合は治るどころか余計に頻度が増している気がする。
俺とルビー、両者ともに身体が大人のそれになっていくためどうしても引っ付かれると色々とまずいのだ。
俺とて中身がアラサー医師だが、体は思春期男子。嫌でも反応してしまうのが若い体の証拠であり、困ったところだ。
最近のルビーは身長だけでなくある部分も順調に発育しており、そのため距離が近いと当たるのだ。あれが。
なのでどうにかして我が妹のひっつき癖を治してやりたいところ。
このままの距離感で異性と接しでもしたら後が大変だ。
更にルビーはアイのようなアイドルになると豪語しており、尚更治

さなければいけない点になった。
何はともあれ今は背中にひっついているルビーを剥がさなければいけない。
アクア「ルビー」
ルビー「スー・・・ ハー・・・ ん？どうしたの？」
アクア「あ、いや。なんでもない」
ルビー「名前呼んでみただけってやつ？ふふ、お兄ちゃんかっわいいー♪」
何か不穏なワードが聞こえた気がする。
【速報】背中にくっついている妹が深呼吸をしていた件について【すごく怖い】
ダメだ。こんなタイトルで掲示板を建てたら「妄想乙w」と言われて終わりだ。
落ち着け、そういった人間の対処法は・・・ ああ、うん。経験した事ないからわからないが正解だな。
よし、取り敢えず引き剥がそう。話はそれからだ。
色々考えてごましているものの、そろそろこの健康な若い肉体も反応してしまう頃だ。反応してしまっても隠し通せば問題はないが急に動けないというのも怪しまれるだろう。
なので早急に引き剥がす必要がある。それだけだ。
アクア「ルビー、ちょっといいか」
ルビー「スンスン・・・ クンカクンカ・・・ 最高ッ／／／」ビクンッ！
アクア「・・・ ルビー？」
ルビー「ふぇっ？・・・ な、なにかな？」
アクア「そろそろ高校生な訳だし、兄離れでもしてみたらどうだ？」
ルビー「・・・ 今、なんて言ったの？」
アクア「いや、な？一応高校生って大人に近いわけだろう？そろそろ兄離れしておいたほうがいいんじゃないのか？アイドルをやる上でも異性にくっつくなんて醜態晒したら不味いだろう？」
ルビー「お兄ちゃん・・・」
なにか途中で全身に冷や水を浴びるような冷気を感じたが、おそら

くあれは気のせいだ。
ルビーは俺から離れて唐突に静かになり、テンションもだいぶ下がったようだ。
どうやら俺の言ったことをしっかり理解してくれたらしい。
やっぱりルビーは物分かりがいい。
ルビー「嫌なんだ…」
アクア「は?…急にどうした?」
ルビー「お兄ちゃんは私と一緒にいるのが嫌なんだよね…?」
アクア「待て、誰もそんなことは」
ルビー「絶対嘘ッ!!!お兄ちゃん、好きな人でもできたの?ダメだよそんなの。私が認めない。何処の馬の骨だか知らない女に…お兄ちゃんは絶対…絶対…渡さないよ?」
前言撤回、物分かり以前の問題だった。
不味い。色々と脳が追いついていないが、俺は間違いなく危機的状況に立たされている。
これは中学校のクラスメイトから聞いた話で確か〝ヤンデレ〟と言ったものがこの状況に該当していたはずだ。
今生で役者をやってきた身として今のルビーは演技をしていると は言い難い。
幼少期にやった神のフリをする演技では才能を感じたが、それ以降特に演技に触れていない上でこんなリアリティ溢れる演技をすることは不可能のはずだ。
実際、ルビーの瞳は暗く淀んでおり黒い星が輝いているような錯覚を受ける。
アイの星は白く輝いていて身を焦がされる思いなのに反して今のルビーは身の毛もよだつような、世界に反逆を誓う復讐鬼を連想させるような様々な感情がドロドロに混じった危険な感じ。
身体の防衛本能が働いたのか、自然とルビーから後ずさりをして距離を取る。
アクア「ル、ルビー、落ち着け。俺に好きな人はいない。俺はお前

を心配してそう言っただけだ。お前を嫌っているなんて事実はどこにもないっ」
ルビー「ふぅん・・・ そーなんだぁ・・・ で？なんで私からニゲヨウトスルノカナァ？」
後ずさった距離を詰めるように、揺らめいた足取りで俺に近づくルビー。
そして遂に俺の背中が壁についてしまい、これ以上距離を取れないと判断してしまった時、冷や汗のようなものが大量に出る。
こんな短時間で汗が出るような経験をしたのはいつぶりだろうか。
こんな経験をする機会は前世を合わせても数回あるかないかだろう。若干現実逃避じみたことを考えていてもルビーの進みは止まらない。
そして俺とルビーの距離はほぼゼロになり、ルビーがしゃがみこんで俺と目線を合わせる。
手を俺の両肩に載せて、まるで獲物に絡みつく触手のような動きで背中に手を回してハグのような態勢になる。
ルビー「もう、絶対に離してあげない・・・。ずっっっと、一緒にいようね。お兄ちゃん♡」
そんなルビーの囁きを耳元で聞いた瞬間、俺の体から力が抜けて意識が遠ざかるのがわかった。

アクア「・・・ ッ！・・・ ハァハァハァ・・・ なんだ、今の」
ここは俺の部屋、携帯を見ると深夜3時。
どうやら今のは夢だったらしい。
夢でよかったという安堵のため息が出る。
流石に今日はもう眠れなさそうだ。
――部屋の外――
そこにはアクアの部屋を覗き込む少女が一人。
ルビー「夢じゃないんだけどなぁ・・・。でも、お兄ちゃんと結婚するのは私だし別にいっか♪」

【現実は小説より奇なり】完
こんなはずじゃなかったんだけどなぁ・・・。

ルビー×アクア（今度こそ）
要素：耳かき＆膝枕、

ルビー「ねーねーっ、お兄ちゃんっ！」
アクア「・・・ 耳かき棒なんて持ってどうしたんだ？」
ルビー「お願いっ！耳かきされて？」
アクア「何が目的だ？金か？」
ルビー「ちーがーいーまーすー！いいからほらっ！」
ルビーはポンポンと自分の太ももを叩く。
アクア「は？膝枕もかよ・・・」
ルビー「ほら早く早くっ」
アクア「仕方ない、あまり深く入れるなよ」
ルビー「うんっ♪マッサージみたいなものだからお兄ちゃんは安心してリラックスしてよ♪」
どうにも信用できないが、ここで断り続けると機嫌が悪くなって余計に面倒なことになりうるため、注意だけしておいて素直に受ける事にした。
ルビー「まずは左耳からね。・・・ ふむふむ、やっぱり手入れしてるんだね。すっごく綺麗だよ」
アクア「なら、やめとくか？」
ルビー「ううん、やめないよ。あくまでこれはマッサージみたいなものだからね。こしょこしょ擽る程度の刺激しか与えないからお兄ちゃんが危惧しているような事にはならないよ」
アクア「ならいいが・・・」
ルビー「それじゃっ、まずは最初に耳の外側をこの濡れタオルで軽く拭いていくね」
アクア「ああ、頼んだ」
柔らかな肌触りのするハンドタオルを適度に濡らして、フェザー

タッチで耳の外側を拭く。その擽ったさと心地よさの中間を行く感触に、アクアは若干眠気を感じ始めてきた。
ルビー「ん～、よしっ。濡れタオルはこんな感じかな。次にステンレス製の耳かき棒で耳を軽くカリカリってマッサージするね」
アクア「力加減しっかり頼むぞー…」
ルビー「おっけー♪それじゃ、始めるね」
いきなり耳の中に耳かき棒を入れることはせず、穴の入り口を軽く撫でていく。ステンレス製のひんやりとしたのが心地よさをさらに掻き立てる。
アクアに襲いかかる眠気も尋常ではなくなってきた。
アクア（こいつ… こんな才能もあったのか…）
ルビーの意外な才能を感じ取ったアクアだが、意識もだんだんはっきりしなくなってきておりそれ以上の思考ができなかった。
ルビー「耳の中はやらないって話だから、最後に梵天だね。この白くてふわふわでもふもふなので耳を癒しちゃいますっ♪」
アクア「あぁ…」
アクアの返答はもはや言葉になっていない。
意識は半分以上無くなっており、脱力状態に陥っている。
ルビーはそれに気づいているのかいないのか、機嫌よく梵天で作業を行う。
梵天の柔らかいふわふわがアクアの耳を満遍なく幸福感で包み込み、微量に意識を保っているところに留めを刺される。
ルビー「こんな感じかなー♪どう？お兄ちゃん…、ふふっ♪まだ片耳だけなのにぐっすりだね。あー、お兄ちゃんの寝顔尊すぎるっ／／／／写真撮っとこ♪」
ルビーは無音カメラを起動してアクアの寝顔をカメラに収めた後、膝に寝かせたアクアを写した自撮りも撮影してパスワード付きのフォルダに保存した。
アクアの頭を優しく撫でながら微笑みを浮かべて
「大好きだよ、お兄ちゃん♡」
瞳の星を眩い白さで輝かせながら想い人でもある兄に愛を囁くの

であった。

【ルビーの細やかな愛】完

なんかちょっと違う気がするけど、これもアリ。

続かなかった連載予定の話　０１～０４

０１

「なんとも…　愚かな話ですね」

夜中だというのに照明の付いていない暗い部屋。ノートパソコンの光だけが、光源で部屋の主を照らしていた。

彼女の視線の先には、『Ｂ小町のアイ、殺害。ファンによる犯行か？』という見出しに占領されたネットの検索結果一覧。

彼女が愚かと指したのは、罪を犯したファンにだけ向けた言葉ではなく、殺害されたアイドルにも向けていた。

眠たげな顔が特徴的な少女はなんの表情も感じさせない雰囲気で、マウスホイールを回して画面をスクロールする。

他にめぼしい記事がない事が分かるとため息を吐いて、動画サイトを開いた。

サイト内の検索欄に入力するのは勿論先程から見ているアイドル殺害事件についてだ。

『Ｂ小町　アイ』で調べるとアイがどういった人物かがわかるようなテレビ番組の切り抜きやライブ映像の切り抜きやらが投稿されている。

それに関する映像をいくつか見てから、少女はつまらなさそうに再びため息を吐いて、動画サイトのホーム画面までブラウザバックする。

（昔からアイドルが狂ったファンに殺されるような事案はあったはずなのに、それを目にしてもアイドルを目指す人間は一向に減らず。結局今回も死人が出てしまう。人気商売の逃れられない宿命とはいえ…　なんだかなぁ）

「ふわぁ～…。流石に今日は遅いですし、就寝してしまいましょうか」

あれから１２年…。

階堂愛蘭　１８歳は通信制大学に入学を果たした。

彼女はその独特な物事の考え方と少し冷たい性格のせいで友人に

恵まれず、このまま登校し続けるのは時間の無駄なんじゃないかと高校二年の時に気付いた。そして通信制大学に進学する事を決めた。
一人を貫いて学校に登校するという選択肢もあったが、在宅で授業が受けられるのに加えて卒業可能であるということを知ってしまったらそちらを選んでしまうのが文明人の性というもの。
そうして彼女は効率よくカリキュラムをこなしつつ自由な時間を得る事に成功した。

「お金を稼ぐ必要は無いですけど、バイト経験はあった方がいいのでは・・・？」
大学生になって数日が経過し、昼ご飯の特製オムライスを食べながら思いついた事であった。
彼女の家は裕福な部類に入り、一人で生活するには余りあるお金が毎月振り込まれ、それとは別に大量のお小遣いが振り込まれる身だ。
生まれてこのかたお金の心配は無いものの、彼女は就職をするつもりでいるのでそのヒントになると思われる就労経験を積もうと考えついたのだ。
偶然点けていたテレビに映っていたのはドラマの再放送。それを見た彼女はすぐにスマホを取り出してブラウザを開いた。
愛蘭が検索したのは芸能関連の臨時スタッフの募集だ。
バイト募集サイトには偶然なのかドラマ撮影の雑用スタッフを募集しており、彼女はあらかじめ登録しておいていた情報を入れて応募した。
力仕事になったとしても彼女は華奢な体格に対して身体能力は鍛えてもいないのにそこらの人間よりも何故か高いのでなんの問題も無いだろう。
この数時間後、彼女の初バイトが決まった。
０２
本日愛蘭が働くのはｗｅｂドラマ撮影に関する雑用スタッフだ。
彼女はキャップにトレーナーにカーゴパンツ、ランニングシューズという個人的に動きやすい組み合わせで現場に来ていた。

「あぁ、君が階堂くんだね。私が今日君に指示を出す大倉だ。なんか頼りない体つきしてるけど、給料分はしっかり働いてもらうからよろしくね」
「はい。改めまして、私が階堂愛蘭です。本日は精一杯働かせていただきます。よろしくお願いします」
大倉は愛蘭の全身を舐め回すように見てから、揶揄いを混ぜ込んだ挨拶をする。
愛蘭はその視線を無視して、綺麗な一礼をした。
「それじゃ、早速だけどあのバッグをあそこに運んでね。中身は落としても大丈夫なものだけどなるべく傷つけないでくれると嬉しいかな。よろしく」
「はい、わかりました。それでは行ってまいります」
大倉は力試しという目的で７ｋｇの重さのバッグを運ぶように指示を出した。あれで運べないようでは、すぐさま突き返すつもりであったからだ。ちなみに正式に契約を行なっていないのでなんの問題もない。
どうなるものかと大倉は口角を微妙に引き上げて愛蘭の働きを見守る事にした。
しかし、全く根を上げずにギリギリ引きずらないぐらいの高さで運べれば合格を与えるつもりだった大倉は愛蘭の動きを見て、いい意味で期待を裏切られることとなった。
愛蘭は両手ではなく片手で空のバッグを持ち上げるかのような軽やかさで運んだのだった。特に表情を変えてる様子や踏ん張りを感じないので、彼女にとってこの程度はなんて事ないのだろう。
「・・・なかなか使えそうじゃないか」
大倉は愛蘭への評価を引き上げた。
見た目はあまり頼りないが、実力の方は確かである為、使ってやるべきだと考えを改めた。
その時、現場から一人の男が歩いてきた。
「あれ、大倉くん。あの娘って臨時の？」
声をかけて来たのは、このｗｅｂドラマを取りしきるプロデュー

サーだった。
「鏑木プロデューサー、お疲れ様です。ええ、そうです。彼女・・・ 階堂愛蘭って言うんですが７ｋｇのバッグを軽々と片手で持ち上げたんですよ。間違いなく使えます」
「ふーん・・・？」
大倉の評価を聞いた鏑木は、危なげなくバッグを運ぶ愛蘭を見る。
キャップや野暮ったい格好で隠れているが、それでも芸能人によくある溢れるオーラというものがにじみ出ている。
彼女が素人であるならばここで画面の中に加えれば何か面白い化学反応が観れるかもしれないと考えた鏑木は大倉にある提案をする。
「大倉くん」
「はいっ、なんでございましょうか？」
「折角キミが高い評価をしてまで気に入ってくれた人材なんだけどさ・・・」
「えっと・・・ 何か不手際でもございましたか？」
鏑木の思わせぶりな言い方に大倉が動揺する。
「いや？そんなことはないんだけどさ、ちょっとキャストの方で使いたいなって思ったのさ」
「えっ、でも彼女素人ですし、役の方はどうされるおつもりで!?」
大倉や他のスタッフからしても今日は最終話の撮影であり、予定もカツカツなのでこれ以上キャストを追加するとなると、撮影自体が破綻してしまう恐れがあるのだ。
ただでさえ評価が散々なドラマだというのに完結もできないとなれば、流石に撮影スタッフとしてのプライドが許せない部分があるのだ。これだけは絶対に捨てられないものである。
「そのぐらいは僕の方でどうにでもできるさ。これは間違いなくお金の香りがするよ」
そう言って気味の悪い笑顔を浮かべる鏑木プロデューサーにその場のスタッフ全員はただ黙って頷く他なかった。
０３
用途不明のバッグを運び終わったら、大倉さんから待機しているよ

うに言われました。まだ運ぶべきものはたくさんあると思うのですが、やはり臨時スタッフとして雇われた身は信用されていないのでしょうか？

仕事が回ってこない事にガッカリしている自分を俯瞰して見ると、どれだけやる気に満ちていたかがよく分かります。学校生活でも高いクオリティで課題を提出して来た身としては、やった事に対してお金というリターンが発生するお仕事というものは、その高クオリティで物事を果たそうとする意識をさらにブーストをかける形で私のやる気につながったようでした。

あまり表に出さないようにその場にポツンと立っていると、奥の方から大倉さんと他に男性が一人こちらに歩いて来た。

「階堂くん、こちらはこの現場で一番偉い方であられる鏑木プロデューサーだ」

「こんにちは、鏑木という者だ。良ければ君の口から名前を聞かせてくれるかな？」

「はい、私は階堂愛蘭と申します。それで私に一体なんの御用でしょうか？」

愛蘭の自己紹介を聞いて満足げに微笑んで頷いた鏑木は、そのままの表情で本題を話す。

「愛蘭ちゃん、君にはこれからスタッフではなくキャストとして撮影に参加してほしい」

鏑木の衝撃的な一言に愛蘭は先ほどのスタッフ達と同様に表情が固まる。

「あの・・・ 私は演技に関して素人で・・・」

「いやいや、それは関係無いんだ。これは雇用主からの依頼だ。これをこなしてくれれば結果はどうであれ、スタッフの時の給料に色を付けた金額を渡そうじゃないか。大丈夫、セリフも一言二言しかないから安心しなさい」

愛蘭は鏑木の提案を遠回しに断ろうとするが、鏑木はそれに被せて断ることができないように多少無理矢理にでも請け負うように言い切る。

愛蘭は若干の不信感を感じたものの、現時点で怪しいものは感じないので、仕方なく提案に乗る事にした。
「・・・ わかりました。その仕事、お引き受けします」
「うん、いい返事を聞けて嬉しいよ。それじゃ、大倉くんから台本と衣装を受け取ったら2番の番号が振られたテントに入ってほしい。そこのメイクスタッフに話は通してあるからね。よろしく」
自分の思い通りに事が運んで機嫌が良くなったのか、相変わらず薄気味悪い雰囲気だがそれが若干柔らかくなったのが感じ取れた愛蘭。
余計な一言が飛び出る前に彼女はテントに向かう事にした。
「・・・ はい。では、また後ほど」
「楽しみにしてるよ」
なんでしょうか・・・、この敗北感。
別に鏑木プロデューサーと勝負していたわけでは無いはずなのに。
とにかく、やると決めたからにはしっかり熟さないと！

04

愛蘭がテントに入ると、鏑木の言っていたメイクスタッフと思わしき若い女性が待ち構えていた。
「あら！貴女が愛蘭ちゃんね～。ささっ！そこのカーテンがかかってる場所で着替えちゃって！」
「あ、はい」
言われるがまま私はフィッティングルームに入って渡されたバッグを開けて衣装を取り出す。
「これは、どこかの高校の制服でしょうか・・・？」
おそらく偽物のはずだが、私が以前来ていたのと同じようなブレザータイプだったので着るのにたいした時間は掛からなかった。
軽くクルッと回って見ると懐かしさがこみ上げてくる。こういった制服は着なくなってまだ1ヶ月程度だが、もう着ないと思っていたものを再び着るというのは感じるものが違うのだ。
そして同封されていた台本を取り出すと表紙に『今日はあまくちで最終話』と書かれていた。
「今日あま・・・ そうか、あの漫画の実写ドラマでしたか。・・・ ？しか

し、ドラマオリジナルの登場人物が多くありませんか？これじゃもはや原作再構成の二次創作みたいです」
私は台本を流し読みをして首を何度か傾げた。
これはただの実写ドラマ化ではなく、別の目的があると、芸能界素人の私でもわかりました。
今日が最終話の収録という事なので後で台本を読む際に過去回を二、三分見て自分の予想があっているか確認しよう。
「おーい、そろそろ着替え終わったカナー？」
向こうの方からメイクスタッフさんの声が聞こえてくる。これは少々時間をかけすぎたかもしれないと反省してから返答する。
「はい、ちょうど着替え終わりました！」
服をバッグに入れてフィッティングルームから出る。メイクスタッフさんの所まで行くと、そこにおいてある椅子に座るように手で指し示されたので素直に従った。
「それじゃ、メイク始めちゃうねー。と、言っても君って顔が綺麗だから照射用ライトからカバーするためのものを塗るだけでも良さそうだね。おねーさん、君のような肌質になりたかったかも」
「そんなに綺麗なんですか？」
色々な角度から見られて少し恥ずかしいが、これも作業を行うのに必要な観察作業の筈だ。正直言ってよくわからないが、身じろぎせずに正面の鏡だけ見ていよう。
ただ、メイクスタッフさんの一言だけ意味がよくわからなかったため聞き返してみた。
「本人が理解できてないのかー・・・。えっと、手入れとかは何してる？」
急にされた質問の意図がわからないが、これも必要な質問なのだろう。
「普通に洗顔です」
「ん・・・？それだけ？乳液とかパックは？」
「必要ないですね、以前それやってみたら逆に肌が荒れたので」
そう、本来乳液やパックなどは肌が荒れない様なもので作られてい

る筈なのだが、過去に試してみた私には何故かどれも合わなかった。
病院で検査も行なったがアレルギーでもないらしい。
この事を電話で海外にいる母に伝えたのだが、「やらなくても綺麗なら別にする必要は無いってだけじゃ無い？大丈夫、愛蘭は私達の可愛い子供なのだから変に心配はする事ないわ」と言われて、後半はともかく前半については納得した。
そんなことがあったので今は洗顔だけだ。メイクスタッフさんの言う通りで私の肌が綺麗なものであるならば両親から授かった遺伝子がとても優秀だったという事だろう。
「愛蘭ちゃんって特殊な肌質してるんだね。あ、そうそう。そういえば愛蘭ちゃん、本当に今日が初めての撮影なの？」
「えぇ、今日は臨時スタッフとしてのバイトでここに来ましたから」
「それでその落ち着き様とは・・・。肝が座ってるんだね。微塵も緊張してる感じがしないよ？」
何かドン引きされている様な気もするが、それについては置いとこう。あと私は表情筋が死んでいるわけでは無いが、動揺の類いのものだけは昔からだんだん出なくなってきていた。
これで困ることは何もなかったが、自分としては機械的に思えて少し嫌だった。
「いえいえ、流石に緊張はしてますよ。ただそれが表に出にくいだけです」
「ホントにー？」
「本当です。一般人がｗｅｂドラマとはいえ、カメラに映るんですから、内心震えが止まりませんよ」
嘘は言っていない。
緊張で吐き気があるし、本音を言って良いのならば今すぐ自室のベッドに飛び込んでお気に入りのビッグぬいぐるみを抱いて寝てしまいたい程だ。
そんな私の言葉を聞いてメイクスタッフさんはあまり納得はしていない様子で作業を継続している。
「ふ～ん？・・・ よしっ！これで終わり。髪型も軽く整えとくねー♪今

の内に愛蘭ちゃんは台本の確認しておいて？」
「わかりました。あの、過去の配信の方を軽く確認してもいいですか？雰囲気を知りたいので」
スマホで動画を再生してスタッフさんの集中力が乱れるかもしれないので一応確認を入れておく。
「いいよいいよー！私の集中力って凄いからイヤホンとかも無しで良いからねー♪」
「ありがとうございます」
確かにメイクスタッフさんの集中力は凄まじい。先程から普通に会話しているのに作業をしている手は一切止まらず、スムーズに行えている。高い練度と集中力を持っているという揺るぎない証拠である。
メイクスタッフさんに尊敬の意を抱きながら台本の付箋が貼ってある場所を開く。鏑木プロデューサーの言っていた通りで本当に二つ程度のセリフだ。
あってもなくても良い様なものなので鏑木プロデューサーが無理矢理ねじ込んだのだろう。
単純なモノなのでこれならばすぐ覚えられる。
同時にスマホで過去回を再生する。
そして主演となる人の演技を見た瞬間、私は首を傾げそうになったが、今はメイクスタッフさんが髪を整えて下さっているのでなんとか抑え込んだ。
（これが俗に言う大根役者ってヤツですか・・・）
主演は演技が下手すぎてセリフが片言になってしまっている。まだふざけて撮った学生の演劇動画の方がまともに見えるほどだ。
ドラマの評価が5点評価中、1．1なのも頷ける。
別タブで主演を調べるとモデルの様でドラマの経験なし・・・ つまり演技はからっきしという事で他の共演者もビジュアルだけの残念な人たちばかりだった。
ただ、一人だけ目を惹く名前があった。
『有馬かな』

結構前に【１０秒で泣ける天才子役』と一時期話題になっていた役者だ。消えたと思っていたがまだこの業界で活動していたことに驚きだが、この子の演技のレベルだけはわざと周りに合わせている。そんな感じがするので、この娘の本気の演技は我々見る側の視線を集めることが優に可能だろう。

この人の素晴らしい演技を生で見られれば、それだけでこの場に来た価値は大いにあるのだが、果たしてそれは叶うのだろうか？

台本や過去回の確認が終わり、撮影現場に移動している最中に別のスタッフさんからいくつか聞いた話をまとめておく。

・今回の現場は演技というよりは容姿の良さを主線として売り出すためのもので、スタッフとしても役者に演技の期待はしていない。台本どおりやってくれればそれで良い。

・本来のストーカー役が契約破棄してしまい、急遽代役が用意された。代役の演技の技術がどれくらいのものか不明。

・今回演じる役は本来いない役の一つで、ストーカーに殺害をやめる様に止めるヒロインのクラスメイトという設定で、泣いたりとかはしなくて良いので言葉で止めることだけを意識してほしい。

色々と思うことはあるが、所詮私は芸能界となんら関わりがなくて、今日限りの素人である。こういうのは思い出として大人しく脳の記憶領域に仕舞っておこう。